

可觀小説卷廿六

一、今喜多益典投藥の儀室鳩巢來狀

庚戌八月大地兒へ來狀の内

拙子手足痛同遍の中、寒氣に向候て別て手足共に不叶に罷成、致難儀候。土屋但馬守殿醫師今喜多益典と申人、毎度彼家中にて老人痛を療し奇效有之由にて、拙者門下の者申聞先頃より此人の藥被下候。最早廿服も被下候。勿論背申氣味は無之候得共、痼疾中々早速効驗は相見え不申筈と存候。其人爲申聞候は、老夫事脉躰面色等陽虛と存候。とかく陽を補ひ候はゞ、自然と氣血もめぐり、手足の痛快く可罷成候。只今手足の痛に取懸候ては、中々急に參事にては無之、結句外の害可有之候間、先づ痛には不構、專に陽虛を補ひ候て、元陽の氣さへ丈夫に成候はゞ、痛はそろ／＼快く可罷成候間、且て急き不申ゆる／＼致養生候様にと、くれ／＼爲申聞候。名越玄意と申、先年京都にて名を得候醫の傳を受候て、附子を好て使申候。附子に製法有之、毒を取申方有之、世に存不申候故、附子を用ひこなし得不申候。

玄意は附子を用ひこなし度々手柄を致候。益典も附子にて

毎度得効申事有之候。此度拙者へも桂附を主藥にして用候由申候。附子はおもしろく存候故、今少給可申と存候。痛には何の効も無之候へ共、頃日ぬけかゝりし齒俄にすはり候。不審に候。是は附子の功と存候。人參をばすきと用不申候。不老湯の儀御申越候。從藤太夫殿も御申越、小寺殿迄藤太夫殿委細に藥功の事書付被越見申候。此躰に候へばいかさま奇効も可有之と存候。乍去只今右益典藥に取交被下事難仕候。追て用ひ候様に可致候。其去年以來方々の妙藥、奇効有之の由にて用ひ見候へ共且て驗も無之候。兎角打身又は症痛等とは違ひ、老夫痛は朞月の功にては參聞敷候。心長に養生仕候はゞ全快の望は無之候へ共、少々／＼つろぎ候へば仕合と存候。以上。

八月廿九日

室 新助

右不老湯は、江戸湯嶋御弓町出口二山左内家に有之藥にて、一貼を酒一升に浸し、病者の分量に應じ幾日もかゝり候て飲果申候。金鐵を忌申候。服藥の内蘿蔔・葱・蒜を忌候。左内父彌三郎は儒者にて、父子共に浪人也。起居

難成數年を経候者及手足不叶の者共、奇効數人有之候に付、其段申進候。

一、月輪の内に兩星入る

本條事

今茲十月三日より五日迄の内、月に星貫候。一夕は月輪の内へ兩星入候。諸人見申者有之候。

一、歸去來辭等の儀室鳩巢來狀

先生御來書

秋季霖雨の上八月廿九日大風雨に洪水の後、時令の風邪致流行候。比日は大方止申候。拙者も風氣痰咳つよく相煩候故、其節は益典藥は止め、風藥を他醫へ頼候て用候。段々致本復候。今程常の通に罷成候間可安御心候。但去年以來五百貼餘藥被下、殊の外藥に退屈いたし、其上食も泥み候故最早十五六日藥止申候。其故食進み氣配は彌快く罷成候。手足痛は同然の中寒氣故に候や、此間は彌不宜、足などはひしと立不申候。一足もひかれ不申候。手も五指透と不叶、食も大方人にくゝめられ申位に候。去共手跡は其に合せ候へば是程にも調申候。兎角痼疾に成中々藥にても參不申候。是を達て宜く致度と存候も、天命を不知と申物に候へば、最早不及貪着、天命次第に可仕と存候。今喜多氏藥も三

十服も被下候得共、少しも効は無之候。今少し藥やすめ、以後又益典藥用申様にも可致候。且また不老湯など少し用ふるにても可有之候。不老湯の儀青藤太夫殿より小寺氏へ、委細被申越候。此度奥源左衛門殿も御用候て、宜敷御覺え候由被申越候。兎角奇効有之と見え申候。乍去只今迄煎藥妙藥奇効の由承候て用ひ見候へ共、少しも効無之候故是にも退屈致候。只此痛にはかまひ不申、元氣を補養いたし申す方の藥を、折節不絶被下候はゞ、其内宜敷儀も可有之候や、七十三と申老人の儀に候へば、末々頼も無之候。

九月十八日御狀に青藤太夫殿、佐兵庫殿を御宅に御招、庭前の菊を御賞觀の由委細被申越、不堪瞻望候。老夫も其地に居候はゞ、御會には必預り可申物をと存候。歸去來の辭の景色を畫申候小幅の掛物、近來御求候を御かけ候由、菊には相應の事に候。菊は久田氏より種御もらひ、此度盛に開申候由、世上はやり大藥にては無之小菊に候由。菊は小花の菊に極り申候。大輪の菊は至極俗成物にて候。陶潛に爲見候はゞ甚嫌可申と存候。頃日病中書物もとくと見申儀